

# 石井芙桑雄さんの文学部

——自転車・こだわり・危機・共同研究——

中原章雄

## 1 自転車

石井さんと最後に話したのは、いつのことだったろうか。いまでは、こちらは週一回の非常勤つとめだから、大学でもめったに顔を合わすことはないので、二、三年前のことだったろうか。

それも、清心館の廊下か、講師控室のあたりで、すれちがって挨拶をかわした程度であったと思う。

その時、石井さんはいつものように急ぎ足で、あらかじめ日常の雑務に巻きこまれるのをなるべく避けようと警戒するかのように、正面をほとんど向いたまま、遠ざかっていったようであった。

いまになってみると、何故そんなに急ぐことがあるのですかと声をかけて、引きとめて一寸立ち話でもすればよかった、と悔やまれることである。

例によって元気過ぎる足どりではあったが、彼ももう六〇歳を過ぎていたはずなのだが、わたしにとっては、以前とあまり様子が変わらない若い同僚という感じが、いつ出会っても残っている人であった。

最初に石井さんの人柄を強く印象づけられたのは、文学部が衣笠キャンパスに移ったころ、つまり三〇年ばかり前だったと思う。

キャンパスの近くを自転車で通りかかった石井さんと、しばらく言葉を交わしたのであった。

彼が自転車で通勤しているらしいことを話題にしたときに、自分は自動車が嫌いなので、と云ったか、あるいは、自動車は使わないので、と云ったか、とに角、大気汚染に加担したくないのだ、という意味の返事が返ってきたことを、いまでも明確に覚えている。

まだエコロジーという言葉もそれほど使われていなかったころであり、まして、エコなんていう略語はもちろんなかった。

衣笠キャンパスの近辺にはまだ畠も各所に残っていたし、西大路や「観光道路」をヴァキューム・カーが走っているのが見られる、多少とも長閑な衣笠の風景であった。

大気汚染というよりも、むしろ黄金の香りが漂ってきてもおかしくない時代であった。

けれども、だからこそ、わたしには、自転車通勤に徹するエコロジーの静かな日常的実践者としての石井さんが忘れがたかったのである。

自転車での通勤に便利なように、衣笠キャンパスの周辺に新居を構えたということも、そのときに彼から聞いたのではなかったろうか。

そういえば、三〇年の歳月が経ったとはいえ、大学への往復に自転車で疾駆する石井さんの姿が、いまでも見えるような気がする。

## 2 こだわり

石井さんの文学部教員歴は、一九七五年から始まっている。紛争の余燼がようやく一応おさまり、かわって、キャンパスの「一拠点」構想が本格化しつつあった時期である。

御所の東に位置する広小路キャンパスと、衣笠キャンパスを統合するという「一拠点」構想は、当時の立命館大学では、今日では想像がつかないほど全学を巻きこむ熱気で、何年にもわたって論議されたのであった。

キャンパスが東西の二つに分かれていることのデメリットがあらゆる角度から指摘され、それを一拠点化することの意義が大学の教学全般にわたって、どれほど素晴らしいことであるかが、これまたありとあらゆる角度から例示され、論じられるのであった。

青写真の段階から、詳細な具体案に至るまで、大学による教授会資料や学生向け配布物が、何種類ものパンフレットとして作成された。

一拠点の実現には学友会・自治会との合意が重視されていたから、学生代表との交渉が何度も全学的に、また各学部で行われるのであった。

そういう場で、各学部の教授会を代表する教員は、とりわけ法学部・産業社会学部など社系学部の教員たちは、大学作成のパンフレットをさらに敷衍して、立て板に水を流すように、見事な弁舌で一拠点構想のすばらしさを、いっせいに述べたてるのであった。懐疑的な意見が認められる余地はなかった。

一九七四年に、わたしは文学部の教務主事を務めていたが、当時の立命館用語をちりばめたパンフレットがなかなか頭に入らない上に、ひとたび学生たちと、とりわけこの問題で対峙すると、舌が硬直し、もつれて閉口したものである。

文学部では広小路の古いキャンパスに郷愁を感じておられる先生方もかなりおられたようだが、全学的には、一拠点実現に教職員と学生院生が一丸となって邁進する態勢がととのい、一拠点化は七〇年代の終りから八〇年代の初めにかけて実現することになる。

こうして、八〇年代は安定した衣笠キャンパスの一拠点の時代が続くのだが、やがて理工学部の新たな展開の構想が浮上し、新キャンパスの必要が説かれ、その策定に向かうことになる。

石井さんが独特のこだわりを見せたのは、この点であった。つまり、キャンパスの一拠点化をあれほど絶対視し、あれほど総力を挙げてその実現を果たしたはずの立命館大学が、なぜまた、十年と経たないうちに、平然と二拠点にもどろうとするのか、ということであった。

石井さんはこのことを教授会で二、三度発言したはずである。ただ発言したのではない。わたしが忘れがたいのは、ふだん冷静な彼がキャンパス問題に関しては、噛みつくような激しい口調で、いかにも苦々しげに、辛辣に発言したからである。

石井さんの意見は、新旧キャンパスの空間的な問題、あるいは物理的な条件の問題よりも、大学の姿勢の変化に向けられていたようであった。

関東の大学を出て間もなく立命館に来た若い石井さんは、キャンパスの移転という問題について、大学ぐるみで白熱した議論を延々と展開し、一丸となってその実現に突き進む立命館の姿に、その時点で、独特の、何か新鮮なものを感じたのではなかったろうか。

東京の諸大学でも、巨大化に伴って、狭い都心から郊外へ移転する動きは立命より先に始まっていたはずである。しかし、それらは物理的な問題として処理されるのが普通であったろう。とこ

ろが石井さんが見たのは、全学が一体となって熱っぽい議論をくり広げる大学の姿であった。いわば、一拠点信仰とでも云うべき現象であった。

それだけに、若い石井さんが初めて感じ取ったものが強ければ強いほど、大学自体による新たな反一拠点の傾向には到底納得しきれなかったのであろう。それだけ深い失望を感じたのであろう。失望は、かつての熱狂をさっさと忘れて、新たな二拠点に雷同し順応するような、他の教員（もちろんわたし自身も含めて）にも当然向けられたはずである。

わたしは、この問題について石井さんと話したことはない。だが、あの嘔みつくような口調は、同僚も含めて、立命館に対する強烈な違和感が心の底にあったからとしか考えられない。

だが、かりにそうだとしたら、わたしは、この追悼の文で書く順序を間違えたようである。文学部の危機的な状況にさいして、教授会の一員として石井さんがいかに的確に、また忠実に対処したのを先に書くべきであったろう。

### 3 危機

一九七九年度という年は、理事会が「新学費方式」による学費改定を提起した年度であった。

この問題をめぐって、秋の学期から学生側との間に何度も交渉が行われた。日本の学生運動は、学園紛争の時代から十年が経過しており、当時は全国的にはすでに退潮期に入っていたはずだが、立命館の学友会・自治会は西日本の私学では依然として最強を誇っていて、交渉は一定のルールにしたがって進行していたとはいえ、いつも凄まじいものとなった。

文学部教授会の執行部は、最初の交渉の時から、「教学総括ができていない」として、学生側から集中砲火を浴びせられ、温厚で真面目な学部長は、いきなり体調を崩してしまった。学生側の論理は、「教学総括」もできていないなら、なぜ安易に授業料値上げを云い出すのか、という意味である。

「交渉の場を自分の不徳から壊した」と思いこんで責任を感じた学部長は、そのまま体調も回復せず、任期一年を残して辞任することになった。十年以上前に亡くなったその学部長が、理事会ではひたすら謝罪したと涙を浮べて直後に語ったのを、同じ専攻の教員として、わたしは、ただ暗然と聞くばかりだった。

後任の学部長には、「文学部の良心」とも呼ばれていた、経験豊かな長老教授が順当に選出された。ただ今度の学部長は、紛争期に、全共闘系の学生との団交で、重要な役職者としていさぎよく異例の全面的な自己批判をされたことがあり、当時を知る教員たちの間では、その時の再現を危惧する意見もないではなかった。

もちろん、そのころとは情勢も、相手も違うのだが、気がかりだったのは、新学部長自身が昔のトラウマをいまも引きずっておられるように見えたことであった。

そうすると、強力な学生集団との交渉には、敏腕の学生主事を補佐役として選ぶしかない。石井さんを推す人が何人もあったのは不思議ではなかった。

石井さんは七七年度にすでに学生主事を一度務めていて、その時の、若いにもかかわらず見事な仕事ぶりが教授会で強烈な印象を残し、すぐ二度目という異例の人事が、むしろ当然のように実現したのであった。

石井さん本人も、学部の非常事態をもちろん十分に読んでいたであろうし、そのような時に逡巡

するような人物ではなかった。

こうして、誠実派の学部長と、実務派で実力派の学生主事という、理想的な執行部が誕生したのであった。

こう書くとなんでもないことのようにであるが、七〇年代後半の文学部では、学部移転の問題は別として、さまざまな異常な事件がつぎつぎと起っていたのであった。それらは大学が編んだ『立命館百年史』の第二巻に詳述されている。とりわけ、「F君事件」と呼ばれる陰惨きわまりない出来事は、全学を揺さぶるほどの事件であった。

また、『立命館大学文学部の五十年』という冊子が、大学紛争の記述をめぐって慎重を期した編集方針にもかかわらず、あるいは、むしろその故に、大学の内外に決して小さくない波紋を投げかけたのもこの時期であった。

若い石井さんは、こうした事件の連続と混乱のなかにあっても、おそらく冷静に、しかし的確に事態の推移を見定め、当時の立命館の状況と文学部の体質を、数年の間に学び取ったのであろう。

石井さんの危機にあつての決断は、そのような日頃の態度なしには、ありえなかったはずである。

このこともまた、今になってみると、彼の口から聞いておかなかったことが残念でならない。

ともあれ、紛争と八〇年代後半の転換期の中の「暗い」時代に、年齢経歴ともに若い石井さんが大きな貢献をされたことは忘れがたい。

#### 4 石井美桑雄と久米邦武

一九八九年から、石井さんは国際関係学部教授の西川長夫さんをリーダーとする、立命館大学の『米欧回覧実記』に関する共同研究に参加している。これは、久米邦武によって編集執筆された、岩倉使節団の報告書であるが、共同研究の成果は、五年後の一九九五年に、約五〇〇ページに達する研究書として結実している（法律文化社出版）。

この共同研究は、二〇名近くもの研究者が主として各自の専門領域に近い分野を分担執筆する形でまとめられている。

ドイツ篇を分担した石井さんは、「久米邦武の文明観から見たプロイセン」と題する力作を寄稿している。

共同研究の各論文は、『米欧回覧実記』を使節団によりまとめられた百科全書的記録とみなすよりも、久米邦武の記録の独自性に力点を置いた読み方を主流としているが、その中でも石井論文は、「プロイセンを見る記者久米の視覚の特質」を、とりわけ強調しているように見える。「記者久米」という表現は何度となく繰り返して論文に登場する。

さらに石井さんは、オーストリアの君主制の「我明治以前の光景と異なる」実態を指摘した時には、「記者久米の無然たる表情と静かな憤怒」を読み取り、さらにそのあとに、「冷徹な観察記録者久米には珍しくその激情を真率に吐露した一文」が続くとまで激賞しているのである。

同様に「記者久米」の内面にまで踏み込んだ評価は、論文の本文だけでなく、後注にまで表れている。その注6を引用しておこう。

「営業力」、文明化の原動力としての「自主の民」、「自主力」「自主の権」のごとく、「自主」の

語は、その文明論に閑説して随所で使われているが、この条のように頻発は珍しい。逆に言えば、数少ない客観的叙述の枠組から外れた主観的感情が激発している箇所に注意深く留意することによって、記者久米の本音を窺うことができるかもしれない。

このように、石井論文は注においてまで、「記者久米の本音」に肉迫しようと試みるのである。

さらにもう一つこの論文の独自の点を挙げるならば、「帝国の首都」の表記法である。石井さんはつねに「ベルリン」と表記し、それは論文の冒頭から目立っている。

ドイツ編の他の二論文も含めて、彼以外は、論集はすべて「ベルリン」という表記であって、何よりも、巻末に収録されている「地名索引」が「ベルリン」であり、特にことわりもなく、この表記に統一されている。

地名表記と地名索引へのこのようなこだわりは、わたしの個人的な注視による指摘ではない。石井さん自身によるものである。

彼は「注2」において、北海道大学による『米欧回覧実記』の共同研究に付けられた「地名索引」に言及し、具体例を挙げながらその正確さを絶讃し、「きわめて有意義」と高く評価している。

「文字としてラテン文字を用いている言語における地名表記はすべて英語音訓みとし、これを「標準的表記」とするのは、地理学界の慣行なのであろうか」と石井さんは問いかけ、地理学にとっては、「地名の訓みと表記が原語音に忠実でない限り、そもそもその考察が成立しないのではあるまいか」と激越な言葉を続けている。

極め付きは、この注の最後の文であろう。そこには（索引の一層の完全性をめざして）「再版の折にはご一考をお願いしたい」とある。これは北海道大学の共同研究への「お願い」なのか、それとも、自らが所属する研究グループ内部での、ささやかな、ひそかな「たった一人の反乱」と読むべきなのだろうか。

それにしても、教授会の一員としても、研究者としても強く発揮された、石井さんの個性的なこだわりは、共同研究よりも、個人研究の場で、その資質をもっと自由に、また豊かに開花させたのではなかったか。

## おわりに

かなり昔のことになってしまったが、数人の教員で雑談していて、大学から配布される書類がさらに多くなって、処理に困るといような話になった。

すると、石井さんがこともなげに、「ほくは、みんな取ってあります」と、ひとこと言ったのだった。

一同ひとしく気圧されて黙ってしまった。ただ、わたしは、石井さんだったら、さもありなんと思ったことであった。彼の立命館教学への執着はそれほどだったのだ。

ところで、石井さん、大学の書類や学問の書類など一切から解放された気分は格別でしょう。

下界と違った、きれいな空気を存分に吸って、どうか、のんびりとお過ごし下さい。

## 〔付記〕

本稿で参照した二書のうち、『百年史』は、最近の学園の急展開との整合性が気になる。『文学部の五十年』では、石井さんの前任者元野氏が紛争期の文学部を代表して回想を担当しているのが注目される。同氏は、着任時ご高齢であり、編集者の考慮もその辺にあらう。氏の紛争の実相との接触は自ずから限られていた。回想は老カフカ学者の学生たちとの美しい交歓記になっている。

(本学名誉教授)